資料５

東京都の文化政策の今後の方向性に関する意見

■杉本博司評議員

東京都の近年の文化政策はそれなりの成果を上げてきたと思いますが、特に例を挙げれば、トーキョーワンダーサイト事業と六本木アートナイトが挙げられると思います。

トーキョーワンダーサイト事業を事業モデルとして、都の所有する老朽化資産で活用されていないものは多々あると思われますが、これらの場を現代のあらゆるジャンルのアートの為の場として活用することは、負の遺産を有効に活用できる有意義な方法であると思います。

六本木アートナイトも投資額に対する集客力には目を見張るものがあり、年々活性化する方向が見えます。地域の他美術館との連携をより強め、プログラムの充実をより図れば、国際的なイベントとして定着することは、必定であると思います。

最後に、都の運営する多くの美術館は改修時期を迎えています。開館時設計の不備、予想集客数の想定読みちがい（写真美術館）等により、現状に即した改修が必要とされます。今回庭園美術館の改修、増築に深くかかわりその感を強くしました。思い切った改修は、問題のある施設を再検討し、各美術館施設を世界レベルのスタンダードへと高めることのできる絶好の機会であると考えます。他にも多々ある中から、以上二点につき、申し上げました。

■平田オリザ評議員

本来、「東京芸術文化評議会」は、アーツカウンシルを目指して組織されたものであり、この評議会の下に、アーツカウンシルの実質を担う調査研究機関を置くべきではないか？

アーツカウンシルの設立にあたっては、国の動向を意識しつつ、重複を避け、一方で東京都のアーツカウンシルが、国のアーツカウンシルを引っ張るようなものを目指していただきたい。

都立の劇団、バレエ団の結成、芸術劇場付属の演劇学校の設立など、さらに大きな夢のある目標を立てるべきではないか。

■宮本文昭評議員

私の経験から申し上げると、アーティストを育成することは大切だが、支援してもらって当たり前というような環境をあたえすぎてはいけない。恵まれた環境の人に成功例が少ないのは、揃いすぎているその環境のせいではないか。アーティストは、自分を世界に認めさせていかなければならない。そのためには、「根性」「気概」「生命力」を培う環境が必要だ。

従って、支援されることが「当たり前」になっている若手には、支援をしないことのほうがむしろよい。さじ加減が大切で、支援する対象を見極めることも重要だ。際立つ才能が１つあればよい（それを伸ばせばよい）。ずいぶん以前に、国の留学制度の要件に「大卒以上」というのがあったが、論外である。是非、支援する対象をしっかり見極め、予算を上手に使ってもらいたい。